

かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗



株式会社吉田組 東京支店土木部 課長代理

上田 智造



1997（平成9）年株式会社吉田組に入社。
以来、高速道路のボックスカルバート工事や高架橋下部工
事等を経験し現在に至る。

「思い込み」に捕らわれず、 「現場のチェック」を欠かさない

与えられた仕事に一生懸命に取り組み、ある程度の自信がついてきた頃のことです。今でもあの時の経験が私の「基本中の基本」の心構えとして身に染みんでいます。

それは入社四年目のこと。私は高速道路のインターチェンジの橋梁下部工で施工担当として測量の座標管理を任されていました。当時は現場にCADが導入された最初の頃です。私は基礎杭を打つ位置を決めるために、座標をCAD図から読み取り、丁張り測量を進めていました。この現場の前に従事した造成工事では半年間、朝から晩まで丁張り測量をやり続けてきたので、作業には習熟、精度にも自信を持っていましたし、インターチェンジのカーブに沿って基礎杭の位置も動いていくので、慎重な作業を心掛けました。しかし、日々目の前の作業に追われてしまい、上司から作業に誤りがないか「常に現場をチェックせえ」と言われていたのにも関わらず、そこまで気が回っていませんでした。これが失敗のはじまりでした。

丁張り測量を終えたとき、たまたま通りかかった同じ現場の先輩社員から「何かおかしくないか」と声をかけられました。そのとき先輩社員は図面を確認したわけではないのですが、これまでの経験から勘が働き違和感に気付いたのです。実際にテープを使い、既設構造物から基礎杭の位置を計り直すと明らかに違いまし

た。事実を見せられた瞬間、私は現実を理解できず、「CAD図の通りに測量していたのだから間違えるはずはない。自分はある！」と何度も主張していました。パニックに陥った私を見かねて先輩社員と一緒に原因を探してくれました。間違いは実に単純。CADの基準座標がズレていたのです。基準を取り直し、再度丁張り測量。工程に遅れも生じず事なきを得ました。指摘を受けずに基礎杭を打ち始めてしまったら……。想像したくもありません。

なぜこのようなことが起きたのか。CAD導入以前、線形計算や座標値は自分の手で計算していました。計算に間違いがあれば、辻褄が合わなくなるので、このような単純ミスは決して起こりません。CADになって便利になった反面、コンピュータが計算しているのだから合っているという「思い込み」が生まれてしまったのです。

「常に現場をチェックせえ」と指導されたのも、同じような経験を先輩がしたからなのです。これから建設業界でも3DCAD、BIM、情報化施工など新しい手法が浸透し、さらに利便性が高まっていくでしょう。それはあくまで道具であり、「現場を見る」ことの重要性は変わりません。私も後輩たちに「思い込み」に捕らわれず「現場を見る」ことが基本中の基本だと言い続けています。